

朝鮮語に潜む日本語の影

日時 2014年6月27日(金) 13:00~14:30

場所 千里山キャンパス 尚文館 1階 マルチメディアAV大教室

講師 熊谷 明泰 (外国語学部教授)

韓国社会では、朝鮮語に及んだ日本語の影響は植民地支配下で他律的に強いられた恥辱の産物とみなされている。こうした認識は、日本語から受けた影響を卑俗語として残存している語彙など、「倭色」漂う借用語に矮小化させた議論に支えられており、日本語からの影響は排斥すべき植民地時代の残りかすとみなされてきた。

一方、近代朝鮮語形成を促進した日本語の決定的役割について言及することについては、研究者たちですら意図的なほどに消極的である。このため、大多数の近代語彙や、さまざまな言い回しが日本語から借用された事実は、韓国社会では今も一般民衆が認識するところとはなっていない。

朝鮮語の近代化は日本語をなぞることによって促進されたが、この言語近代化の基本的枠組みは、すでに朝鮮開化期に出来上がっていた。しかし、近代化の途上で日本の植民地となり、政治、行政、司法、科学・技術、軍事、教育などの公的言語領域は「国語」(=日本語)によって支配されたことにより、少なくとも1945年までは、これらの言語領域における近代朝鮮語の体系は確立されえなかった。

解放後、日本の敗退と共に急激に推し進められた朝鮮語モノリンガル社会への移行は、日本語が支配していた公的言語領域を全て朝鮮語に切り替えることを意味したが、その過程で日本語からの影響を排除することは難しく、日本語の語彙、構文、言い回しなどが朝鮮語の衣をまとって定着していった。例えば、植民地時代は日本の法律で司法が展開されたが、解放後も引き続き10余年にわたって日本の法律を「依用」(外国の法令を臨時に借用)し続けたため、韓国の法令文は日本の法令文を丸ごとなぞるようにして成立した。

これまで、日本語からの影響は1870年代から1945年までの時期に焦点を当てて論じられてきた。しかし、公的言語領域のことは1945年以前には朝鮮語では確立していなかったがゆえに、実は解放後にこそ日本語の影響が朝鮮語に深く定着してきた側面が論じられていない。

日本語はかつて朝鮮語の民族的純潔性を汚したという、否定的な認識ばかりが韓国社会に拡散している。しかし、このような認識は日朝言語接触の一つの側面に言及しているだけであって、日本語との接触下で進行した近代朝鮮語成立の実相に迫るものではない。講演では、具体的に資料を提示しながら、近代朝鮮語が成立してきた歴史に対する再認識を試みたい。

* * *

●聴講無料 予約は不要です。多数のご来場を歓迎します。
手話通訳が必要な場合は、6月12日(木)までに人権問題研究室へご連絡ください。

第79回 10月24日(金) 13:00~14:30 「障害者権利条約をどう生かすのか? ~京都での条例作りの経験から~」(仮題)

第80回 11月28日(金) 13:00~14:30 「戦争と女性」(仮題)

会場は、尚文館 1階 マルチメディアAV大教室



主催 関西大学人権問題研究室

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35 阪急千里線「関大前」駅下車

Tel 06-6368-1182 Fax 06-6368-0081

ホームページ <http://www.kansai-u.ac.jp/hrs>